

しんしろ助産所新聞

第9号

発行元
しんしろ助産所
H23年6月27日



病院と連携して分娩リスクに対応

聖隷三方原病院の産科オープンシステムを利用したお産のできる助産所としてオープンしてから4年が経過しました。

この間、安全・安心なお産ができるように、嘱託医や病院との連携はますます強固なものになっていきます。2015年3月末での出産利用者は64名（このうち7名の方は妊娠から出産までの間に病院管理に移行）。産科オープンシステムでは、クリニックであっても聖隷三方原病院の妊婦健診を妊娠20週、30週、36週以降は隔週で受診することになっています。助産所ではこの健診に加え、妊娠初期と妊娠34週にも病院を受診します。病院の産科に受診歴があることで妊娠中の

異常にもスムーズに対応していただき、妊婦さんには、助産所の助産師と一緒に付き添う健診スタイルや、病院の案内も繰り返していただき、時間をかけることで助産師との関係も深まり、安心して受診につながっています。

開設当初は、妊娠20週までは地元で対応できると予測していましたが、開設2年目に助産所に通いだしたばかりの方が出血し、掛かりつけと連絡がとれず、時間外に遠方の病院を受診したことが問題になり、妊娠初期から受け入れていただけるようになりました。

ローリスクの妊婦さんが対象ですが、長い妊娠期間中には、切迫流早産や、妊娠高血圧症などの治療が必要に

なることもあります。こうした場合にも、嘱託医や連携施設が決まっているので速やかに対応できています。平成25年には分娩監視装置遠隔送信システムも導入され、今まで以上に、スピード感のある情報伝達が可能になりました。

聖隷三方原病院としんしろ助産所の連携の一番の特徴は、妊婦健診に付き添い、嘱託医や産科スタッフと顔を合わせ、診療に参加させてもらえることです。場所も、職場も異なる助産所の助産師を、同じ医療チームの一員として遇し、出産や対応の振り返りを通じて意見を交換し、次の出産に備えていただけることに感謝しています。自分たちからすれば、出産の振り返りは当たり前ですが、これにより判断力が磨かれリスクも低減されているように感じます。

今後、安全に加え、女性にしかできない出産が満足感のあるものになるよう努めて参ります。

幼児の死因の1、一番にあがるのが不慮の事故。中でも「窒息」は事故原因の上位にあります。

何でも口に入れてしまう幼児。片付けや整理、整頓などの予防策ももちろん重要です。でも、万一のどこに詰まらせてしまったら・・・いくら気を付けていても不測の事態が起きないとも限りません。

大事ないのちを救うには初期対応が大切です。しんしろ助産所では「こどもの救急研修会」と題し、乳幼児に多い窒息時の対応や心肺蘇生を講義と実技訓練を通して学んでもらっています。

こどもの救急研修会 ～誤嚥・窒息時の対応～

初期の対応で救命率は格段に上がります。心肺蘇生や窒息解除法は練習を重ねることに自然と身体が動くようになります。そのため、助産所でも1、2カ月に1回程度の研修会を計画しています。日程は「子ども園メール」や「助産所ブログ」（しんしろ助産所だより）でお知らせします。関心のある方ならどなたでもご参加いただけれます。もちろんリピーターも大歓迎です。

合言葉は「誰もが救助者になれます！」
多くの方々のご参加をお待ちしております。



小さなお子さんのいるママたちは真剣そのもの。実技は本番さながらであっという間に時間がすぎました。

平成26年度に生まれた赤ちゃん



電話番号：0536-32-1050
E-mail：s-josanjo@tees.jp
ブログ：しんしろ助産所だより

<http://shinshirojosanj.o.dosugoi.net/>

